

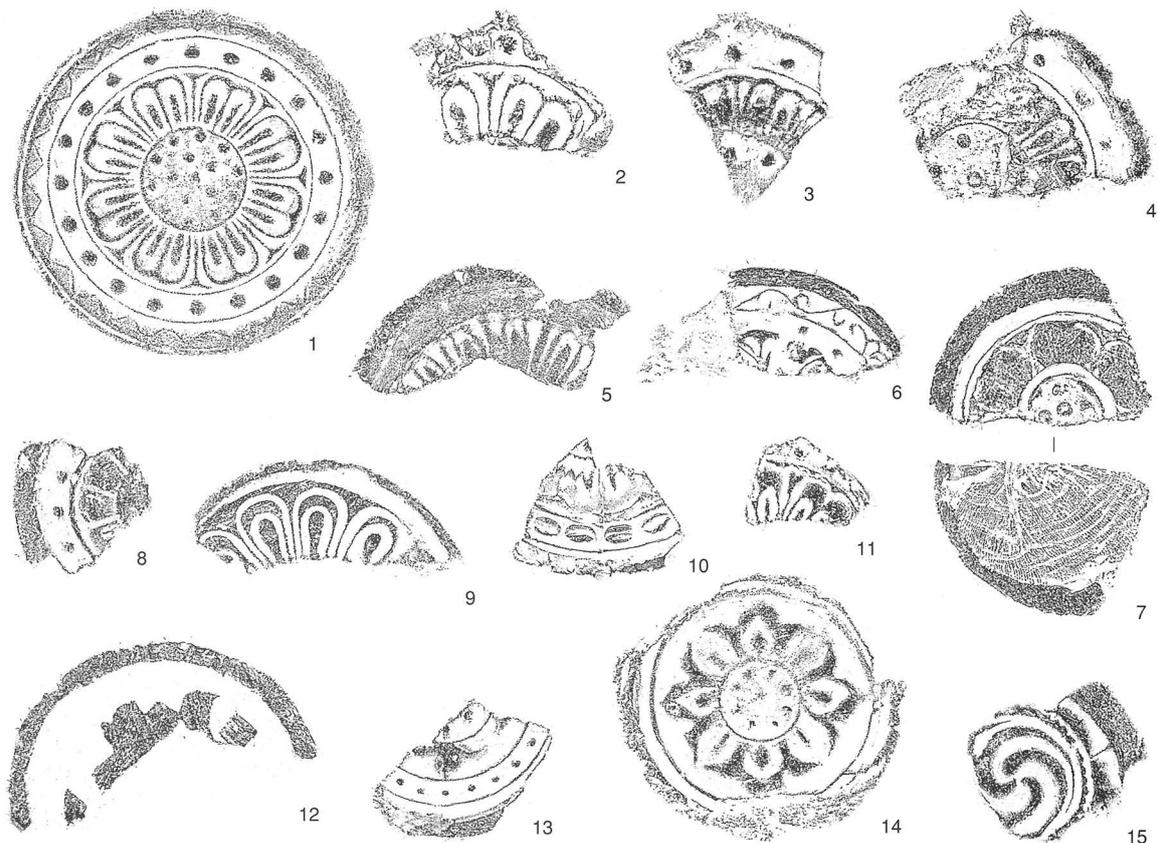
## 4 出土遺物

### (1) 瓦

今回の調査で出土した瓦は軒丸瓦111点、軒平瓦128点、丸瓦約14000点、平瓦約30000点、道具瓦14点、瓦の時期は興福寺の創建期から近世までに至る。以下、古代の軒瓦について概述する。

**軒丸瓦** 1は6301Aで興福寺創建の軒丸瓦である。瓦当面径は18.6cmあり、瓦当側面には範端の痕跡、瓦当裏面には布目がみられる。6301型式は計12点出土した。このうち6301Aと認定できたのは計10点あり、範傷はほとんどない。範端痕跡があるものは計3点、瓦当裏面の布目痕跡がみとめられたのは計4点ある。2は久米寺式の6271型式で、瓦当裏面に布目はみとめられない。以上は興福寺創建時の瓦であろう。3、4は外区外縁素文、内縁珠文の東大寺式6235型式で奈良時代後半の瓦である。

5は単弁蓮華文で『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』（興福寺、1978年）の19に類似する。6は外区に唐草文と珠文を飾る蓮華文、7は外区に圏線を1本めぐらす花卉で、瓦当裏面に布紋り目がある。以上は平安時代前期から中期の瓦であろう。8は外区珠文帯の単弁蓮華文、9は外区の狭い単弁蓮華文である。10は外区に紡錘形の珠文帯がめぐる複弁蓮華文で、播磨産の可能性はある（上原真人「院政期播磨系瓦屋の成立年代とその背景」『第5回京都市埋蔵文化財研究会発表資料集』京都市埋蔵文化財研究会、1997年）。11は外区珠文の複弁蓮華文。12は梵字「アク」か「アーク」の正字である。13は外区珠文帯の四葉宝相華文で薬師寺86（『薬師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所、1987年）と同範、14は圏線縁の宝相華文で薬師寺87と同範である。15は外縁に花卉と細かい刻み目の圏線を飾る三巴文。以上は永承再建以降、治承の兵火以前の軒丸瓦であろう。

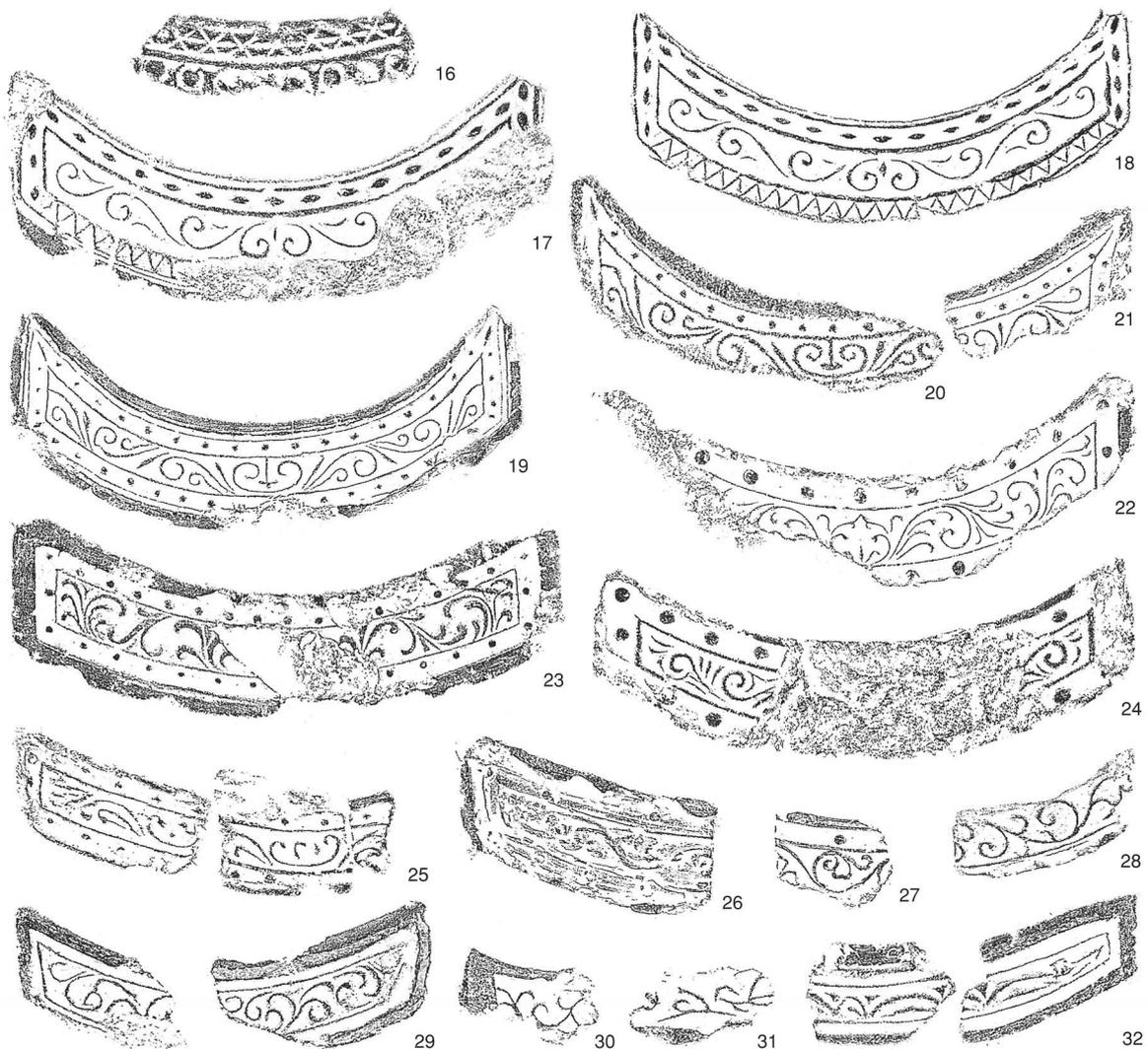


第15図 出土軒丸瓦（1：4）

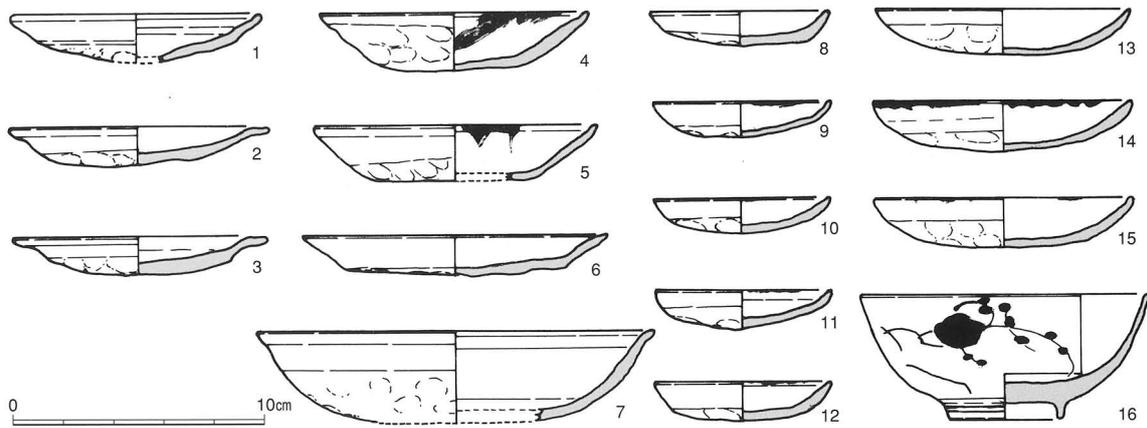
軒平瓦 16は6561Aだが、下端に指捻りの文様帯がない。17は6301Aと組む興福寺創建の6671Aで、段顎である。6671Aは計19点出土した。顎の長さは5～11cmまでの幅があり、8cm前後のものが最も多い。18は6671Lで、顎前端に幅1cmの顎面をもつ曲線顎Ⅱで珍しい。このほかに6671型式と確認できるものが10点ある。19は6682Dで計8点あり、これまでも興福寺で出土している型式で、平瓦部凸面に縦縄タタキと萱負いの朱が残る。すべて廃棄土坑SK8390から出土している。20は6682Gで、興福寺で既出。21は6667Aで法華寺に同範例がある。以上は奈良時代前半に属する。

22は6732Eで東大寺創建期の軒平瓦、23は西隆寺創建期の6739Aで、内区右上隅に範傷がある。3点あり、すべて廃棄土坑SK8390から出土した。24は6763Cで過去に興福寺からの出土例がある。25は6711Bで平城宮に同範例がある。以上は奈良時代後半の瓦である。

26は残存状態が悪いが、珠文縁の偏行唐草文で段顎につくる。平安時代前期から中期の瓦であろう。27は珠文縁の偏行唐草文で、薬師寺277に類似するが異範である。28は素文縁の唐草文で段顎。29は素文縁3回反転の唐草文で、薬師寺264と同範である。瓦当部右上角を斜めに面取りしている。30は唐草文で曲線顎、31は素文縁の植物文で曲線顎である。32は波状に配した植物文で低い段顎である。以上は平安時代後期、おそらく永承年間の再建以降、治承の兵火以前の軒平瓦であろう。



第16図 出土軒平瓦 (1:4)



第17図 出土土器（1：3）

## （2）土 器

興福寺境内の一連の調査において、発見された土器の出土量は多くない。今回の調査区は回廊の外側を含み、とくに南面回廊の南側を中心に、鎌倉時代から室町時代かけての土器がめだって出土した。また、内庭部に位置する廃棄土坑や内庭部上層の包含層では、平安時代と江戸時代の土器が多く出土した。興福寺は長年にわたって法灯を保ちつづけてきた寺院である。本来、境内は清浄に保たれるべき場所であるので、土器などを投棄した土坑は火災直後の廃材を処理するための短期的な使用であったと想定される。これらの土坑から出土した土器は、興福寺の年表を照らし合わせることができるといふ点で、南都における古代から近世にかけての土器編年を考えるうえで重要な資料である。

比較的まとまって出土した資料について概説する。焼土を含む廃棄土坑SK8395からは土師器皿が出土している。いずれもやや赤みを帯びた淡褐色を呈し、11世紀後半の様相を示す。1～3は器高が低く、いずれも強いヨコナデで口縁部を引き出し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面はゆるくナデ調整を施しているが、指頭圧痕が残る。4～6は平らな底部とまっすぐに広がる口縁をもつ。口縁端部は比較的強いヨコナデが施され、やや外反する。全体的にナデ調整で仕上げられているが、底部には指頭圧痕が残る。4、5は油煙の痕跡が残る灯火器であろう。7は比較的大形の皿。口縁端部はヨコナデされ外反する。外面は比較的丁寧にナデ調整を施すが、指頭圧痕が残る。

内庭の遺構面上に堆積する茶灰色砂質土の包含層からは江戸時代の土師器皿、陶磁器がまとまって出土した。土師器皿はいずれも淡茶褐色で、焼きしめられている。大小2種の規格がある相似形で、斉一性が高い。8～12は径約7cm、器高約1.5cmの小皿で、8以外は油煙の痕跡が残る。13～15は径約10cm、器高約2.0cmの皿で、14、15は油煙の痕跡を残す。大小の土師器皿ともに、灯火器として用いられていたことがわかる。16は染付の茶碗で、見込みに無釉の重ね焼き痕を残す。

## （3）銭貨・金属製品

調査区内の土坑、溝、礎石抜取穴、包含層、表土から合わせて82点の銭貨が出土した。銭種の判明する75点のうち、3点が北宋銭（熙寧元寶1・元符通寶1・元豊通寶1）、46点が寛永通寶、3点が文久通寶で、18点が明治時代から昭和20年にかけて通用した銅銭（半銭6・一銭8・二銭1・五銭1・五十銭2）、5点が現在通用している硬貨（五円2・十円3）であった。

鉄製、銅製の金属製品が合わせて69点出土している。鉄製品の多くは釘で、49点ある。銅製品には鋳造品の小片や、鋳などの飾金具や銅針金などがある。

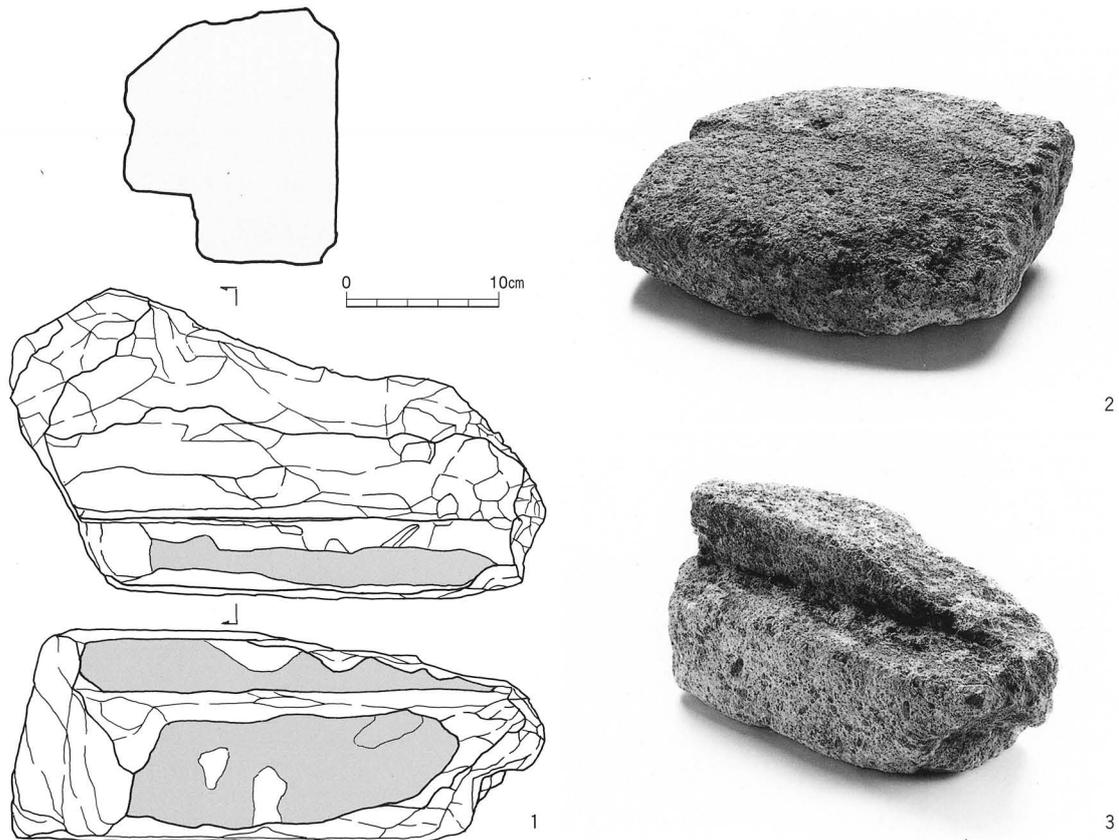
#### (4) 石 材

石材は回廊基壇外装の地覆石と羽目石を中心に、21点が出土した。石質は凝灰岩が中心で、軟質の流紋岩質凝灰岩角レキ岩（二上山～ドンズルポー産。以下、凝灰岩A）と、硬質の流紋岩質溶結凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩B）に大別できる。主に内庭部上層の包含層から出土した。

**回廊地覆石** 地覆とみられる石材は10点あり、1点をのぞいて凝灰岩Bである。断面寸法は幅19～22cm、厚み7～9.5cmで、計画寸法は幅7寸、厚み2.5～3寸ほどとみなせる。長さは27～30cmで、回廊基壇縁に残る地覆と比べると短めである。上面と推定される面には、幅8.5～16cmの風蝕があり、残り8.5～10.5cmは平滑な加工面を残す。幅7寸のうち4寸が露出し、3寸に羽目石がのる構造が想定される。地覆石01(第18図2)は出土位置不詳だが、凝灰岩Bで6面すべてに加工面が残る。幅22cm、厚7cm、長27cm。上面の幅12.5cmに風蝕が確認され、残り9.5cmの平滑面に羽目石をのせたと推定する。

**回廊羽目石** 羽目石とみられる石材は9点あり、いずれも凝灰岩Aである。地覆石との仕口の形状は、羽目石の裏から厚み6～8.5cm、高さ3.5～5.5cm以上の突部を残して表側を欠き取り、地覆石の基壇内側肩にのせる構造となる。突部の設計寸法は厚み2寸以上、高さ1.5寸以上と推定する。羽目石の厚みは地覆石上面の風蝕差を考慮して、6寸程度であったと推定しておく。羽目石02(第18図1・3)は、溝SD8383出土。幅32cmで地覆石仕口の突部が残り、厚7.5cm、高4cmを地覆石裏面にはめ込んだと考える。地覆石に接する加工面は平滑に仕上げられており、下端面と裏面はやや粗い加工面が残る。

**回廊基壇外装の復元** 遺構の地覆石には凝灰岩A・Bが混用されている。凝灰岩Aが当初材、凝灰岩Bは改修時の補填と考えられる(『概報II』)。羽目石は遺構・遺物ともに凝灰岩Aである。回廊基壇では仕口を羽目石側だけに施しており、加工性の高い凝灰岩Aが用いられたものと考えられる。



第18図 石材

1 羽目石02実測図(1:5) 2 地覆石01(上面手前が風蝕面) 3 羽目石02(写真は羽目石裏面が下)